

スポーツイベントによる地域活性化への効果  
— 開催地住民の評価に着目して —

北村 尚浩\*, 野川 春夫\*, 柳 敏晴\*, 川西 正志\*, 萩 裕美子\*, 前田 博子\*

**The Effect on the Community Relations from the Sports Event**  
— The evaluation by Community Residents —

Takahiro KITAMURA\*, Haruo NOGAWA\*, Toshiharu YANAGI\*,  
Masashi KAWANISHI\*, Yumiko HAGI\* and Hiroko MAEDA\*

**Abstract**

An increase in sports events has been accompanied by an increase in the studies of the influence of sports events on community relations. However, little is known about the evaluation of sports event by community residents. Therefore the purpose of this study was to investigate the evaluation of sports event by community residents, from the perspective of event-community relations. The questionnaire was developed to measure the effect of sports events on event-community relations. The data for this study were collected from a total of 290 residents who live in Ibusuki, Kagoshima prefecture, where an annual running event called the "Ibusuki Nnohana Marathon" is held.

The main results are as follows:

1. The residents living in Ibusuki have a positive attitudes about event-community relations.
2. Older people (over 60 years old) show more positive attitudes toward event-community relations than younger people (under 30 year old).
3. The residents living in central Ibusuki show more positive attitudes toward event-community relations than others.
4. The residents who have past volunteer experience show more positive attitudes than those with no past volunteer experience.
5. The sports participants show more positive attitudes than non participants.

These results suggest some problems in attitudes toward event-community relations.

**KEY WORDS :** *Community residents, Event-community relations, Sports event*

**緒 言**

近年の地域活性化への気運の高まりは、1979年に大分県の平松知事が提唱した「一村一品運動」に端を発している。この時期、各地で中央依存型の体質からの脱皮を模索する動きが活発になり、

「一村一品運動」はそのさきがけとして全国から注目を集めた<sup>8)</sup>。そして、町おこし・村おこしのムーブメントは、地域活性化のための政策として話題を呼んだ「ふるさと創生一億円事業」によって全国に広まり、1987年の「総合保養地域整備法（通称リゾート法）」成立前後には、リゾート開

\*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

発による地域活性化への試みが相次いだ。さらに同年には地域の活性化を基本的課題に掲げた「第四次全国総合開発計画（四全総）」も閣議決定されるなど、地域活性化の動きは一段と加速することになった。その後のバブル経済の崩壊に伴い、リゾートブームこそ下火になったものの、地方分権化への流れとともに、地域活性化のための施策は多くの地方自治体によって模索され続けている。

このような中であって、地域活性化のための手段としてスポーツを利用する自治体も増えてきた<sup>20)</sup>。特に国際レベルや全国レベルのスポーツイベントの開催は、地方自治体にインフラ整備や観光客の誘致といった社会経済的な副産物をもたらす<sup>5)19)</sup>。この数年間にも1994年の広島アジア大会、1995年のユニバーシアード福岡大会、世界体操競技選手権鯖江大会などの国際大会が開催され、1998年に冬季オリンピックを控える長野では、スポーツ施設の建設をはじめ都市整備が進んでいる。

一方、町おこし・村おこしの一環としての、地域レベルでのスポーツイベントも隆盛をみており、それらがもたらす経済波及効果なども明らかにされている<sup>14)</sup>。さらに「ふるさと創生一億円事業」においても、スポーツイベントへの期待が大きいことが報告され<sup>17)</sup>、スポーツイベントは地域におけるスポーツ振興のみならず、町の知名度を高め、観光客の誘致や住民意識の高揚など地域活性化への期待をも担っているのである。

こうした背景のもと、スポーツイベント（以下、イベント）を扱った研究も、キャリアパターン<sup>11)</sup>や社会的背景<sup>9)</sup>、イベントに対する期待と満足<sup>1)</sup>、リピーターの特性<sup>18)</sup>など参加者に焦点を当てたものから、イベントが地域活性化にもたらす効果に焦点を当て、マネジメントの視点に立った議論へと移り変わりつつある。そして特に、経済的な効果や街のイメージづくり、住民相互の仲間意識の高揚や地域のスポーツ振興などのイベント効果が指摘されている<sup>3)10)12)13)19)</sup>。その一方で、海老原は、イベントによる社会経済的效果の影響を受けるのは、当面の間、開催者である行政的機関と専門的機関であるとした上で、イベント開催地住

民の反応についての議論が欠落していると指摘し、イベント開催による地域住民の変容こそが地域活性化に結びつくとして、イベント開催地の住民による評価の重要性を示唆している<sup>4)</sup>。すなわち、これまでのイベント研究の多くが参加者やボランティアなどイベントに直接関わる人々を対象としたもので、開催地に居住する人々の視点に立ったイベント評価は、ほとんど手つかずの状態なのである。原田ら<sup>5)</sup>は国体開催地住民の意識を事例的に報告し、国体開催によるインフラ整備や住民意識の向上などに対する評価が開催県によって異なることを明らかにしている。そして、2巡目を迎えた国体が新たな役割を担いつつあることが指摘されている。また、広島アジア大会に焦点を当てた谷口らによれば、大会前後で市民のコミュニティ意識やスポーツ観に変容が見られたことが明らかにされており<sup>15)</sup>、これら意識変容の持続性についても報告されている<sup>16)</sup>。一方、イベント開催地のサービス関連業の経営者を扱った菊池らの研究によれば、イベントから直接利益を受けている業種の経営者ほど、高い関心を持ってイベントを評価していることが報告されている<sup>10)</sup>。さらに、イベントのボランティアを扱った研究では、恒常的性質と地域住民の内発的性質とが地域活性化には必要であるとした上で、イベント運営におけるボランティアの継続性を確保する必要性が説かれている。そして、地域イベントにおけるボランティアの定着には、イベント内容に対する住民の理解と関わりが影響を及ぼすことが示唆されている<sup>3)</sup>。すなわち、住民の理解なくしてイベントの成功は困難であり、海老原の指摘に見られるように、開催地住民の立場からのイベント評価が不可欠といえる。

そこで、スポーツイベントの開催を開催地の住民はどのように評価しているのか、特に地域活性化の視点から検討しようと本研究に着手した。

## 目 的

本研究では、イベントに対する住民の評価を地域活性化の視点から明らかにし、今後のスポーツイベント運営のための基礎資料を得ることを目的

とする。

## 方 法

### 1. 研究の対象

本研究で対象としたのは、鹿児島県指宿市の居住者である。指宿市は、鹿児島市から南へおよそ40km、乗用車で1時間あまりのところに位置する世帯数12,262世帯、人口31,473人の町で<sup>7)</sup>、天然砂むし温泉をはじめ温泉地として知られている。この指宿市では毎年1月に「指宿菜の花マラソン大会」、5月には「指宿トライアスロン大会」が開催されるほか、近年ではウォーキング大会も開催されている。特に、「指宿菜の花マラソン大会」は1982年(昭和57年)に306名の参加者のもとで開催された「指宿温泉マラソン大会」以来、今年で16回目を迎え、現在では鹿児島県内外から1万人を超える人々が参加する大規模なイベントになっている。本研究では、この「指宿菜の花マラソン大会(以下、菜の花マラソン)」に対する住民の評価を、地域活性化の視点から明らかにする。

### 2. 調査の概要

本研究で用いたデータは、質問紙調査によって

表1. 調査票配布及び回収数

配布数	回収数	回収率
608	290	47.7%

収集した。「第15回指宿菜の花マラソン」開催前日の1996年1月13日に、指宿市の人口のおよそ4分の1が集中する指宿市大牟礼、湊、湯の浜の3地区において調査員が各世帯を訪問して調査の趣旨を説明、協力の要請を行った上で所定の質問紙を返信用封筒とともに手渡し、郵送法によって回収した。その結果、調査票の配布数は608、回収数(率)は表1に示すように290(47.7%)であった。なお、調査票配布後に調査票が第三者の手に渡ったケースもあったとみられ、返送されてきた調査票にはこれら3地区以外の居住者からのものも含まれていた。本研究は指宿市内の居住者を対象とするものであり、居住地が指宿市内の調査票はすべて分析の対象とすることにした。

調査内容は、1) 個人的属性、2) 菜の花マラソンの評価、3) スポーツ参加、4) コミュニティ・モラルに関する項目である。

### 3. 分析方法

これまで、イベントが経済的な効果や街のイメージづくり、スポーツ振興などの効果をもたらし、地域活性化に結びつくとされてきた。しかしながら、開催地住民の側からみた地域活性化の指標については、議論されていないのが現状である。そこで本研究では、先行研究<sup>12)14)19)20)</sup>においてスポーツイベントが地域社会にもたらす効果として指摘されている、①住民意識の高揚、②地域活性化、③イメージづくり、④スポーツ振興の4要因

表2. 菜の花マラソン評価項目

1.. 仲間意識の高揚 「マラソン開催は、この町の人たちの仲間意識を高める」
2.. 相互協力 「この町の人たちは菜の花マラソンのためにお互い協力しあっている」
3.. 町の活性化 「菜の花マラソンでこの町が活性化されている」
4.. 経済的効果 「菜の花マラソンは地域経済のために役立っている」
5.. イメージアップ 「この町のイメージアップにつながっている」
6.. 町の宣伝 「この町の宣伝になっている」
7.. スポーツ振興 「地域のスポーツ振興に役立っている」
8.. 子供のスポーツ 「子どもたちのスポーツ活動によい影響を与えている」

について、表2に示す8項目をイベントの地域活性化に対する評価項目として設定した。これら8項目は「そう思う」から「思わない」までの4段階のリッカートタイプスケールによって測定され、4段階の評定順にそれぞれ4から1までの得点を与えて数量化した。

この評価スコアについて、まず全体の傾向を把握するために平均値を算出した。次に個人的属性、菜の花マラソンにおけるボランティア経験の有無、日常のスポーツ参加状況を独立変数として大会評価の平均スコアを求め、それぞれの変数においてt検定ならびにF検定による平均値の差の検定を行った。

## 結果及び考察

### 1. サンプルの属性

本研究におけるサンプルの属性を表3に示している。男女の比率をみると男性が140名(48.3%)、女性145名(50.0%)とほぼ同じ割合であった。年齢別では60歳以上の割合が最も多く、以下40歳代(23.4%)、50歳代(17.2%)、30歳

代(14.8%)、20歳代(8.6%)の順で中高年者の割合が多くを占める結果となり、平均年齢は50.27歳である。職業別では自営業者が30.0%を占めた。居住地区別では、湯の浜地区が105名(36.2%)で最も多く、次いで大牟礼地区79名(27.2%)、湊地区56名(19.3%)の順であった。これらの3地区以外に居住する「その他」の地区居住者からの回答は1割あまりであった。菜の花マラソンへの参加経験については、選手として参加したことがある者は13.1%に過ぎず、ボランティアの経験がある者が22.4%と最も多かった。大会役員の経験者は、わずか3.8%にとどまった。今回調査を実施した地区は、指宿市のほぼ中心部にあたり、マラソンコースで調査地区が二分される形になる(図1)。スタート・ゴール地点にも比較的近い場所であるにもかかわらず、選手としての参加経験者が1割あまりしかみられないのは、1万数千人もが参加する菜の花マラソンは、開催地の住民が参加してスポーツに親しむといういわゆる市民参加型のイベントとは、性質が異なることを示唆している。また、本研究ではサンプルの平

表3. サンプルの属性

N=290		n (%)		n (%)	
性別				居住地区	
男性	140 (48.3)			大牟礼	79 (27.2)
女性	145 (50.0)			湊	56 (19.3)
N. A.	5 (1.7)			湯の浜	105 (36.2)
				その他	39 (13.4)
年齢				N. A.	11 (3.8)
20歳代	25 (8.6)			参加経験(選手)	
30歳代	43 (14.8)			あり	38 (13.1)
40歳代	68 (23.4)			なし	252 (86.9)
50歳代	50 (17.2)			N. A.	0 (0.0)
60歳以上	102 (35.2)			参加経験(ボランティア)	
N. A.	2 (0.7)			あり	65 (22.4)
職業				なし	223 (76.9)
会社員	40 (13.8)			N. A.	2 (0.7)
自営業	87 (30.0)			参加経験(大会役員)	
公務員	22 (7.6)			あり	11 (3.8)
主婦	48 (16.6)			なし	278 (95.9)
その他	66 (22.8)			N. A.	1 (0.3)
N. A.	27 (9.3)				

均年齢が高いこともあり, 中高年者層が気軽に参加するのは難しいイベントであるとも考えられる。1992年に開催された12回大会までは5kmのコースも設定されており, 10kmとフルマラソンしかない現状と比べると, より広く市民に開かれたイベントであったように思われる。今回の調査でも自由記述欄に5kmコースの復活を望む声がいくつかみられた。参加者が1万人を越えるようになり, 今後はいかにして市民が参加しやすいイベントにしていくかということも, 一つの課題といえよう。

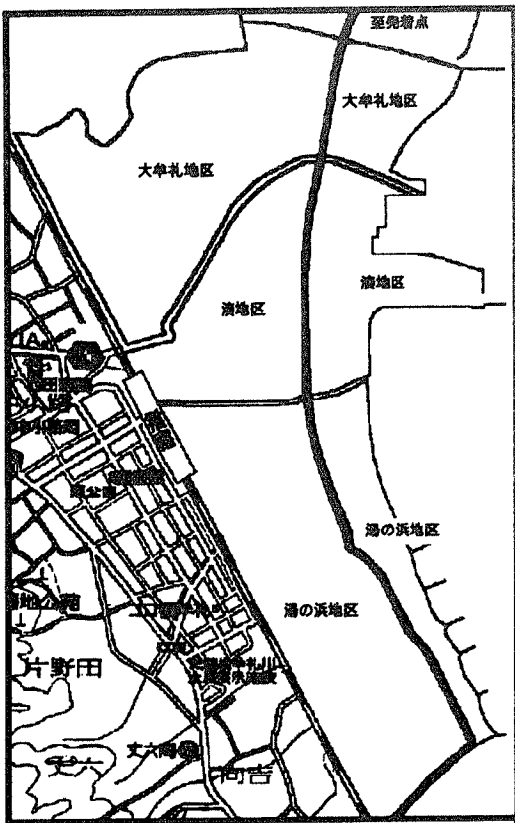


図1. 調査票配布地区とマラソンコース (太線)

## 2. 菜の花マラソンの評価

菜の花マラソンの地域活性化に対する評価項目を, 「そう思う」から「思わない」までの4段階評定順に4から1までの得点を与えて数値化し, 間隔尺度を構成するものと仮定して平均スコアを求めた。表4には, 評価項目に対する全体の平均

表4. 菜の花マラソンの評価

	全体 (N=290)
仲間意識の高揚	3.21
相互協力	3.18
町の活性化	3.23
地域経済の振興	3.23
イメージアップ	3.68
町の宣伝	3.73
スポーツ振興	3.23
子供のスポーツ	3.18

スコアを示している。いずれの項目においても全体のスコアは3.0を越えており, 本研究のサンプルは菜の花マラソンが地域活性化に及ぼす影響について, 概ね肯定的な評価をしていることが明らかである。

特に高いスコアを示したのは「町の宣伝」と「イメージアップ」の2つの項目である。菜の花マラソン開催によって指宿市の知名度が高められ, イメージアップに結びついていると評価されていることがわかる。指宿市のサービス業経営者を対象とした先行研究において, 菜の花マラソンによる「指宿のイメージアップ」に対する期待が強いことが明らかにされている<sup>8)</sup>。つまり本研究の結果は, 菜の花マラソン開催が指宿市民の期待に答えていると評価されていることを示すものである。また, 参加者の募集も民放テレビ局を通じてスポットCMを流しており, このことが知名度の向上に大きく貢献していると思われる。

## 3. 個人的属性による菜の花マラソンの評価

サンプルの個人的属性についての各項目を独立変数として菜の花マラソンの地域活性化に対する評価を比較したところ, 年齢, 職業, 居住地区でいくつかの傾向が明らかになった。

まず, 年代間で各項目の平均スコアについて有意な差がみられたのは, 表5に示すように「仲間意識の高揚」「相互協力」「町の宣伝」「スポーツ振興」「子供のスポーツ」の4項目であった。いずれの項目でも60歳以上が最も高いスコアを示し, 50歳代が2番目のスコアで続いている。

「仲間意識の高揚」については, 最も高いスコ

アを示した60歳代以上に対して、20歳代が最も低いスコアであった。20歳代は「相互協力」でも2点台のスコアを示しており、若年層の地域社会離れを感じさせるような結果である。「町の宣伝」では、最も低いスコアを示したのは40歳代であった。しかし、20歳代、30歳代とスコアにほとんど差はみられず、50歳代以上と40歳代以下のそれぞれの年代を境にして、評価に差がみられるようである。地域のスポーツ振興に対しては、20歳代と40歳代が低いスコアを示している。また、子供のスポーツ活動に対してよい影響を与えたとする評価は20歳代が最も低いスコアを示しているが、40歳代のスコアの低さも目立つ。児童期の子供が実際にいるであろうと推察される年代だけに、地域のスポーツ振興、特に子供のスポーツに対して、菜の花マラソンが好影響を与えているかどうかという実感的な評価と考えることができる。

次に、職業による菜の花マラソンの評価についてみてみた(表6)。職業では「仲間意識の高揚」「イメージアップ」「子供のスポーツ」の3項目について有意な差が認められた。無職とその他と答えた者を除くと、公務員が全般的に他よりも高いスコアを示しているのが注目される。これは、有

意差がみられなかった他の項目においても同様にみられた傾向である。仲間意識が高められたどうかについては公務員のスコアが最も高く、会社員、主婦と続く。町のイメージアップについて、最も高いスコアを示したのは会社員で、公務員、自営業、主婦の順であった。子供のスポーツについても公務員のスコアが最も高く、会社員、自営業と続いている。

菜の花マラソンによる経済波及効果についての研究では、経済的にプラスの影響を受ける者ほど菜の花マラソンに対する関心が高いと報告されている<sup>10)</sup>。よって本研究でも、経済的な影響を受けやすい自営業者の評価が注目された。しかしながら、業種によっても異なるであろうが、相対的にみて自営業者の評価は必ずしも高くなく、菜の花マラソン開催による自営業者のメリットはそれほど大きくないようである。この結果は、菊池らの研究<sup>10)</sup>で報告された内容と一致するものである。

ところで、菜の花マラソンのコースは、指宿市の陸上競技場を発着点として指宿市、開閉町、山川町の1市2町を通る周回コースとして設定されているが、本研究では発着点に近い指宿市大牟浜、湊、湯の浜の3つの地区を中心に調査票の配布を

表5. 年齢別による大会評価

	20歳代 (n=25)	30歳代 (n=43)	40歳代 (n=68)	50歳代 (n=50)	60歳以上 (n=102)	F 値
仲間意識の高揚	2.96	3.12	3.00	3.22	3.43	3.07*
相互協力	2.84	3.00	3.13	3.18	3.37	2.85*
町の宣伝	3.64	3.63	3.62	3.78	3.84	2.43*
スポーツ振興	3.00	3.21	3.03	3.24	3.42	2.83*
子供のスポーツ	2.84	3.10	2.91	3.22	3.48	6.28**

\* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01

表6. 職業による大会評価

	会社員 (n=40)	自営業 (n=87)	公務員 (n=22)	主婦 (n=48)	無職 (n=33)	その他 (n=31)	F 値
仲間意識の高揚	3.15	3.05	3.57	3.11	3.52	3.39	2.43 *
イメージアップ	3.83	3.69	3.73	3.50	3.82	3.84	2.22 *
子供のスポーツ	3.13	3.09	3.23	3.02	3.61	3.39	2.58 *

\* p&lt;.05

行った。そこで、サンプルの居住地区によって評価がどのように異なるのか検証したところ、表7に示すように「町の活性化」について有意な差がみられた。最も高いスコアを示した湯の浜地区は、旅館・ホテルなどの宿泊施設が多く市営砂むし温泉があるなど、菜の花マラソンの前後には参加者で最も賑わう地区であり、実感的に町の活性化として感じられているようである。一方、大牟礼、湊の両地区は、湯の浜地区と比べると宿泊施設は少ない地区といえる。さらに、その他の地区には指宿市の中心部や発着点から離れた地区が含まれており、人が多く集まる賑やかさがすなわち町の活性化として評価されていると考えられる

#### 4. ボランティア経験、スポーツ実施による評価

イベントに直接関わったか否かによって、その評価は異なることが予想される。そこで、菜の花マラソンにおけるボランティア経験の有無による評価の違いをみた。サンプルを過去のボランティア経験の有無によって2つのグループに分け、それぞれの項目の平均スコアを算出して比較したところ、すべての項目においてボランティア経験のある者の方が経験のない者よりも高いスコアを示

した。t検定によって差の検定を行った結果、表8に示すように「仲間意識の高揚」「相互協力」「イメージアップ」「町の宣伝」の4項目で有意な差が認められた。イベントのボランティアに関する調査報告の中で、8割以上のボランティアが地域活性化に貢献したと感じていることが報告されている<sup>3)</sup>。ボランティアとして大会運営に直接関わる中で、ボランティア相互間の協力や一体感などが生じるのは当然のことと考えることができるだろう。すなわち、多くの市民がボランティアとしてイベントに関わることでイベントに対する住民相互の意識の高揚に結びつき、ひいては地域社会への愛着やコミュニティ・モラルなどの高揚につながる可能性を持っているのである。

次に、スポーツ参加状況として、日常のスポーツ実施による評価をみた。サンプルをスポーツ実施頻度によって、「ほとんどしない」「あまりしない」と答えた者を非実施群、「時々する」「よくやる」と答えた者を実施群に二分し、それぞれの項目の平均スコアを算出して比較した。その結果、いずれの項目においても実施群のスコアが高いことが明らかになった。t検定による有意差の検定では、「仲間意識の高揚」「スポーツ振興」「子供

表7. 居住地区による評価

	大牟礼 (n=79)	湊 (n=56)	湯の浜 (n=105)	その他 (n=39)	F値
町の活性化	3.12	3.11	3.42	3.08	2.84 *

\* p<.05

表8. ボランティア経験による評価

	ボランティア経験		t 値
	無 (n=223)	有 (n=65)	
仲間意識の高揚	3.14	3.41	-2.06 *
相互協力	3.12	3.37	-2.08 *
イメージアップ	3.64	3.82	-2.64 **
町の宣伝	3.69	3.84	-2.53 **

\* p<.05 \*\* p<.01

のスポーツ」の3項目で有意な差が認められた(表9)。最も大きな差がみられたのは「子供のスポーツ」で、スポーツ実施者の方が、菜の花マラソンによって子供のスポーツ活動に良い影響が及ぶと評価しているようである。また、地域のスポーツ振興に役立っているという評価でも、実施者と非実施者との間に差がみられる。すなわち、スポーツ実施者の方が非実施者よりもスポーツイベントが地域のスポーツ振興に及ぼす影響を強く感じ取っていると考えられる。そして、日常的にスポーツに親しんでいる者ほど、菜の花マラソンに対して高い関心を持って評価していると考えられる。

## 結 語

本研究の目的は、スポーツイベントに対する開催地住民の評価を、地域活性化の視点から明らかにすることであった。そのため、毎年1月に「指宿菜の花マラソン大会」が開催される鹿児島県指宿市の市民を対象に質問紙調査を実施し、個人的属性、ボランティア経験、スポーツ参加状況の各変数を独立変数として、地域活性化に関する評価を検討してきた。本研究のサンプルによる「菜の花マラソン」が地域活性化に及ぼす影響について、主な結果は次のとおりである。

- 1) 「菜の花マラソン」について指宿市民は概ね肯定的な評価をしている。
- 2) 年齢別にみると、60歳代以上の評価が高く20歳代の評価が低い。
- 3) 居住地区による評価では、ホテルや旅館などの宿泊施設が多い地区での評価が高い。
- 4) ボランティア経験のある者は、ボランティア経験のないものよりも高い評価をしている。

5) 日常的にスポーツを実施している者は、非実施者よりも高い評価をしている。

このようにしてみると、菜の花マラソンという一つのイベントがもたらす地域の活性化について、いくつかの課題が見えてくる。

一つは若年層の地域社会への関わりである。若者の地域社会離れといったことがよく言われるが、指宿市も例外ではないようである。ここ十数年の間に指宿市の20歳代, 30歳代の人口は着実に減少しており<sup>7)</sup>、イベントによって「仲間意識の高揚」や「相互協力」が高められることで地域社会への帰属意識が強まり、若年層の地域社会離れに歯止めをかけることも可能になるかもしれない。

次に、住民による地域活性化についての評価が、一過性のものとなる可能性である。居住地区による評価にみられたように、来訪者の多い地区で活性化されているとする評価は、一時的なものである可能性を否めない。町の恒常的な活性化に結びつくことが、理想的なイベントの効果といえる。この点について本研究で論じることはできないが、今後、イベントの効果を議論する際には検討すべき課題である。

そして、ボランティア経験者のように、大会に直接的に関わることでイベントに対する評価も違ってくる。すなわち、より多くの住民がボランティアや選手としてイベントに直接関わっていきけるようなプロモーションが、地域活性化のための課題の一つといえよう。

菜の花マラソンは300名あまりの参加者で開催された第1回大会以来、着実に参加者数を伸ばし、現在のような大規模な大会に発展してきた。指宿市長の「おもてなしを通じて、地元の人々と選

表9. スポーツ参加状況と評価

	スポーツ実施		t 値
	非実施(n=174)	実施(n=113)	
仲間意識の高揚	3.13	3.35	-2.04 *
スポーツ振興	3.13	3.38	-2.49 *
子供のスポーツ	3.08	3.54	-2.67 **

\* p<.05 \*\* p<.01



手の皆様が深い心のつながりをもてる大会」を指した大会』という言葉<sup>6)</sup>には指宿市はホスト役、といったニュアンスが強く感じられる。つまり、菜の花マラソンは市民参加のためのイベントとしてではなく、指宿市以外の人々のためのイベントとして位置づけられているのである。しかし、地域以外からの来訪者が増えることで地域が活性化されるとは断言できず、海老原が指摘するような皮相的な地域活性化となる可能性も否めない<sup>4)</sup>。イベントが及ぼす地域活性化の指標について、今後十分に議論していく必要があるだろう。

また、今回調査を実施した地区は指宿市のほぼ中心部にあたり、コース沿いに位置しており比較的人が集中する地区である。よって、このサンプルによる結果をそのまま指宿市民の評価であるとするには自ずから限界がある。これらの点を改善し、スポーツイベントによる地域活性化の客観的な測定が今後の課題といえる。

## 謝 辞

本研究のデータ収集及び統計処理については、本学大学院社会体育学コースの大学院生ならびに生涯スポーツ学講座の学生諸君に多大な協力をいただいた。ここに感謝の意を表します。

## 文 献 (References)

- 1) 天野郡壽・山口泰雄・神吉賢一・岡田明 (1992) ウォーキングイベントの参加者研究(2)ーウォーカーの期待と満足ー, 日本体育学会第43回大会号 A, 171.
- 2) 地方自治政策研究会 (1989) 全国ふるさと創生一億円データブック.
- 3) 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)ーボランティアの視点からー, 鹿屋体育大学研究紀要6号, 69-76.
- 4) 海老原修 (1996) 地域社会におけるスポーツイベントのからくりーまちおこしは, まち興し, それともまちお越しー, 体育の科学 Vol.46, 374-981.
- 5) 原田宗彦・鴨居啓・富山浩三 (1992) 国民体育大会に対する開催地住民の意識:沖繩・京都・北海道の事例, 体育学研究第37巻2号, 305-313.
- 6) 指宿菜の花マラソン実行委員会 (1996) 第15回指宿菜の花マラソン大会プログラム.
- 7) 指宿市企画課 (1996) 統計いぶすきー平成7年度刊行ー.
- 8) 五十嵐富英 (1991) 地域活性化の発想ー自立・挑戦・交流ー, 学陽書房, 東京.
- 9) 神吉賢一・山口泰雄・天野郡壽・岡田明 (1992) ウォーキングイベントの参加者研究(1)ーウォーカーの社会的背景ー, 日本体育学会第43回大会号 A, 170.
- 10) 菊池秀夫・野川春夫・山口泰雄・長ヶ原誠 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(3)ー地域活性化の視点からー鹿屋体育大学研究紀要6号, 77-84.
- 11) 長見真・嘉戸脩・宮内孝知・菊幸一・雨宮輝也 (1992) 中高年スポーツ参加者のスポーツ・キャリアパターンについてー第4回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者の調査からー, 日本体育学会第43回大会号 A, 169.
- 12) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠・池田勝・三浦嘉久 (1990) 地域活性化におけるスポーツイベントの総合研究調査報告書.
- 13) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1)ーイベント参加者の視点からー, 鹿屋体育大学研究紀要6号 57-67.
- 14) 野川春夫・山口泰雄・萩裕美子 (1994) スポーツ・ツーリズムと経済効果に関する研究, 平成5年度文部省科学研究費(一般研究 C) 研究成果報告書.
- 15) 谷口勇一・松尾哲矢・荒井光貞 (1996) 国際スポーツイベントの波及効果に関する社会学的研究(1), 福岡大学体育学研究.
- 16) 谷口勇一・松尾哲矢・大谷善博 (1996) スポーツイベント開催に伴う波及効果の持続性に関する研究ー広島市民のアジア大会後の意識変容からのアプローチー, 日本体育学会第47回大会号, 201.
- 17) 山口泰雄 (1992) スポーツイベントの現状と参加者の視点, みんなのスポーツ 153, 18-20.
- 18) 山口泰雄・神吉賢一・天野郡壽・岡田明 (1992) ウォーキングイベントの参加者研究(3)ーリピーターの特性ー, 日本体育学会第43回大会号 A, 172.
- 19) 山口泰雄・野川春夫 (1992) 地域活性化におけるスポーツイベントの社会経済的研究, 平成3年度文部省科学研究費(一般研究 C) 研究成果報告書.
- 20) 山口泰雄・野川春夫 (1996) スポーツ都市づくりと地域振興に関する研究, 平成7年度文部省科学研究費(一般研究 C) 研究成果報告書.